

はんにやしんぎょう
『般若心経』について (三)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

Ⅲ. 『般若心経』の内容について (1)

1. 題名の『般若心経』の「心」とは何か

～「般若波羅蜜多の心真言を説く経典」と理解することができます

経典の題名の「心 (サンスクリット原語ではフリダヤ hrdaya)」の語は「心臓」の意味がありますので、「心髄」とか「核心」とか「精髓」とか「真髓」の語に現代語訳されることが多いです。しかし、同時に「真言」「心呪」、つまり「呪文」の意味もあります。『般若心経』よりも少し時代は下がりますが、密教経典の漢訳では「フリダヤ」の訳語として「真言」あるいは「心真言」の語が当てられているケースが極めて多いのです。たとえば代表的な密教経典の一つである、不空訳の三巻本『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』では、「フリダヤ」に対して概ね「真言」あるいは「心真言」の訳語が用いられています。またこの経典の別訳である、施護訳の三十巻本『仏説一切如来真実撰大乘現証三昧大教王経』では「心大明」または「大明」と訳されています。この「明」も、ここでは「呪文」の意味です。

また『般若心経』の漢訳①(鳩摩羅什訳)の題名は「大明呪経」ですし、今日では失われている最も古い支謙の訳でも「呪経」です。これらは明らかに、「心 (hrdaya)」を「真言」「心呪」の意味で理解していることとなります。具体的には、「大神呪」であり、「大明呪」であり、「般若波羅蜜多の呪」であるところの末尾の真言「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提、娑婆訶」を指していることは言うまでもありません。

弘法大師空海は、その主著の一つである『般若心経秘鍵』において『般若心経』を密教経典とする解釈を示しています。その根底には、『般若心経』のすべてが最後の「呪」に集約するとの思想があります。「この心真言によって、すなわち般若心の名を得」(頼富本宏訳注『般若心経秘鍵』宮坂宥勝監修『空海コレクション』ちくま学芸文庫, 2004, p. 342)

そして「真言は不思議なり、観誦すれば無明を除く。一字に千理を含み、即身に法如を証す」と述べているように、心真言の一字の中に膨大な般若経の思想がすべて含まれている、として、それを読誦することの功德と利益の大きさを説いているのです。

呪文は、唱えてはじめて効果が現れます。であるからこそ、『般若心経』を唱えることに大きな意義があります。真言とは、「真実の言葉」です。「真言」は一般的にはサンスクリット語の「マントラ (mantra)」の訳語ですが、これは数多ある仏典の漢訳語の中でもトップクラスの名訳だと思えます。インドでは、紀元前1000年頃に成立したヴェーダ聖典にまで遡ることのできる、「真実の言葉」を発声することへの3000年にもおよぶ長い信仰の伝統があります。「正しく発せられた真実のことばは、神々をも従わせるほどの強い力を持つ」と信じられていたのです。日本にも古くから、「言霊」という同じような信仰がありました。ですから、良いことは大きな声で話してもよいが、悪いことは声を潜めて話すし、字も小さく書くようにしてきました。この『般若心経』もまた、声に出して正しく読誦すべき経典なのです。

2. 「行深般若波羅蜜多」について

「般若（智慧）」とはブッダのこころの働きです。『般若心経』が難解だと言われるのは、本来は言語の領域を超越しているブッダのこころの働きを、不完全な人間の言語によって表現したため、ブッダならざる、まだ悟りに到達していない人間には理解が困難になっているのです。ですから、私たちもブッダになりさえすれば、『般若心経』に説かれていることは、ごく当然のこととして、大変よく分かるに違いありません。

ブッダのこころの働きにならって、自らのこころを働かせるように実践していくことが大乘の菩薩の修行ですが、それがカンペキな状態になったのが「波羅蜜多（完成）」というようになります。しかし同時に、「波羅蜜多」とは、ある静的な止まった状態ではなく、かんたん間断なく変動し続けるプロセスの持続とも考えられます。

大乘仏教の菩薩の理想は、目的に到達することではなく、そこに至るプロセスを実修し続けることにあります。『大日経』では「方便究竟（他者へのはたらきかけを究極目標とする）」と言い、『般若理趣経』の「百字偈」では「菩薩勝慧者、乃至尽生死、恒作衆生利、而不趣涅槃（菩薩というすぐれた智慧ある者は、人々の輪廻が尽き果てるまでの長い時間に亘って、恒に人々のためになる行為を実践し、涅槃の境地に自分が先に入ってしまうようなことはしない）」と説いています。真言宗にとって極めて重要であるこの2篇の経典に説かれているこれらの言葉は、修行の完成よりも、他者への手助けを実践する修行をずっと行い続けることの意義を強調しています。

『般若心経』においても、修行者である観自在菩薩は、般若波羅蜜多を深く行じて自分が悟りに到達して、それではいよいよ、ということではなく、般若波羅蜜多を深く行じた状態において、他の人々への救済の働きを行うのです。

ところで、般若波羅蜜多を実修するときには、固定的な立場を離れて、絶対的な存在や見解は無いのだと思うのですが、先にIで取り上げた「エラソー型」の本のように、「今までの『般若心経』の解釈はすべて間違っている、私のこの解釈こそが絶対正しいんだ！」と主張する人が結構多いのは、何だか不思議に思えます。

